



本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖 語 錄 改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共 金壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯
一本多日生上人 特價 金壹圓七拾錢 送料共

申込所 東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人統一團 振替東京九四二〇番

一月「教」誌 定價一冊 金拾錢 送料共 金壹圓貳拾錢 一ヶ年前金 金五厘

申込所 東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所 振替東京一〇九四〇番

目 次

輕舉盲動を警む 聖訓摘要…………… 日 生 見 人
 釋尊と日蓮聖人(上)…………… 和 賀 義 正
 日什正師諷誦章講話(三)…………… 木 賀 義 正
 日生上人を憶ふ(其九)…………… 田 上 三 生
 品川問答三景…………… 塚 上 三 生
 記 事

○本部團報 ○各地教信
 ○寄附團費誌料領收 ○編輯室より

第三十八年六月號

料告廣一統			價定一統		
四	半	一	一	半	一
分	頁	頁	分	分	冊
一	頁	頁	年	年	冊
頁	金	金	年	年	冊
金	五	九	金	金	金
五	圓	圓	貳	貳	貳
圓	圓	圓	圓	圓	圓
事	之	金	送	送	送
		前	料	料	料
			共	共	共
			五	五	五
			厘	厘	厘

昭和八年四月廿四日印刷納本 (第四百五十六號)
 昭和八年五月一日發行

不許複製

編輯兼 磯部滿事
 發行人 磯部滿事
 印刷所 東京市品川區南品川二丁目一八一
 電話高輪六〇二四番

發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七
 財團法人統一團
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番

輕舉盲動を警む

佛敎の修行に戒、定、慧の三學あり、スピード時代には殊更に一日一度は靜慮の時を要す。

昨今京大瀧川教授に關する問題の意外に擴大せるを見る、蓋し最高學府の出來事として吾人は嘆嗟禁じ得ざる者なり。

『學問の獨立、研究の自由』素より可なり大に望む所なり。然も其の中軸根據なくして洋々たる學究に没頭するの弊は、寧ろ多く迷路に墮し井蛙の見を出でず、三證已に明かなり。

『恩師を擁して私學設立』の如きある美名の許に結束せる之れ却て師を陥れ、身を壞り親を忘れ、世を毒する邪義小計に非らずして何ぞ。

寔に慎むべし、不拔なる信ありとも、恭順たる信相なきの災する處眞に恐るべし。

新紙復た徒らに誇大妄想の筆を致し、事を好むなくんば幸なり。

汝等宜しく禪定に入れ、其時自から容知啓けん、敢て世上の輕舉盲動を警むと云爾。

(滿生)

聖訓摘要

日生上人

下山御消息 (承前)

例せば逆臣が旗をば官兵は指す事なし、寒食の祭には火を忌むぞかし。(縮刷遺文錄)

これは釋尊に反對する者の言ふことは一切用ひてはいかぬといふ事から仰しやつたのである。兎に角國家で言へば、皇室を中心にして順逆の理といふものが分れて來る。哲學の議論や西洋の倫理學などは兎も角として、日本の國に就いては、皇室に順ふ者と逆く者とに依つて順逆が分れる、佛法に就いては釋尊を中心にして、そこに順逆といふ事が分れる、だから何も難かしいことはない。然らば、例へば足利尊氏といふやうな者が如何にえらかつたとしても、皇室に背いたといふ逆賊であれば、忠義の武士がその逆賊の旗持をして行くといふことは無いだらう。佛敎徒が釋尊の向ふを張つて、釋尊を蔑ろにするやうな言ひ分の旗持になるといふことはいかぬ。それは假令日蓮宗で言はうが何處の宗旨で言はうが、弘法大師が言はうが、誰が言はうが、「弘法大師の旗持なれば少々やつても宜からう……」そ

れはいかぬ、その人間は如何にえらくとも、足利尊氏が如何なる人物であらうとも、逆賊の旗持はいかぬ、弘法大師が如何なる人物でも、釋尊に背いた者の旗持はいかぬといふ事を日蓮聖人が言はれるのである。「逆臣が旗をば官兵が指す事なし」で、その者がどんなえらい人物であつても、忠義の武士であれば叛逆者の旗持はしないのである。又寒食の祭と言つて寒行をする時には火を忌むといふことである、それは寒行をするといふのに炭を澤山焚いたり、ストーブを焚いて寒行をするといふことは無いから、寒行といふ事になれば先づ一番に火を遠ざけるが如くに、佛法の正義といふ事に就いては釋尊に反對する者を以つて第一の罪惡とするのである、日本に於ては皇室に反對する思想を第一の罪惡として居る、そこを明かにしてかゝらなければいかぬ。「いくら寒行だからと言つても、まるきり火無しではやりきれない、焚火ぐらゐしても宜いだらう」といふやうな事はいかぬ。寒行は絶対に火を忌むものであるといふ風に、佛教徒は釋尊に違反する觀念を絶対に否認しなければならぬ、そこに於て手緩くてはいかぬといふことを仰しやつて居る。この頃のやうな寒中に寒詣りをするといふのでも、やはり綿入などを着てやつてはいかぬ、成るべくは裸がよいけれども、裸では往來を飛んで歩くのに巡查が小言をいふから薄い物を着て、さうして尙ほ水でも溶る、雪の降つて居る山の上にも行くといふのなら宜いけれども「どうも今夜は單衣では寒いから外套を引かけて行かう」……、そんな手緩いことではいかぬ。佛教に於ては釋尊の味方をする、味方をせぬといふ問題に就いて「些つと位やつたつて宜いぢやないか」……

それがいかぬ、一言と雖も釋尊にケチをつけるやうな事をいふ者は、佛法の上に於ては謗法破佛の大罪なりといふのである。そこは日蓮聖人が明言して居る、それを法華宗の者が——マア他の宗旨の者の判らぬのは逆賊の仲間だから仕方がないとしても、日蓮門下と言ひながらそこが判らぬやうになつて來ては到底駄目な譯である。

世間の法にも法に過ぎは怪しめといふぞかし。國を治する人などが人の申せばとて委細にも尋ねずして、左右なく科に行はれしは、あはれ悔しかるらんに。夏の榮王が湯王に責められ、吳王が越王に生擒にせられし時は、賢者の諫曉を用ひざりし事を悔ひ、阿闍世王が惡道身に出て他國に襲はれし時は、提婆を眼に見し耳に聞かじと誓ひ、乃至宗盛がいくさに負け、義經に生擒られて鎌倉に下されて面をさせし時は、東大寺を燒き拂はせ、山王の御輿を射垂りし事を歎きし也。今の世も又一分もたがふべからず、日蓮を賤み諸僧を貴ひ給ふ故に、自然に法華經の強敵となり給ふ事を辨へず、政道に背きて行はるゝ間、梵、釋、日、月、四天、龍王等の大怨敵となり給ふ。法華經守護の釋迦、多寶、十方分身の諸佛、地涌千界、速化佗方、二聖、二天、十羅刹女、鬼子母神、他國の賢王の身に入り代りて國主を罰し、國を亡ぼさんとするを知らず、眞の天のせめにたゞもあるならば、たとひ鐵圍山を日本に引回らし、須彌山を蓋として十方世界の四天王を集めて、波際に立て竝べて防がするとも、法華經の敵となり教主釋尊より大事なる行者を、法華經の第五の卷を以つて日蓮が頭を打ち、十卷共に引

き散て散散に蹋たりし大禍は、現當二世にのがれ難くこそ候はんずらめ。(繪詞遺文録) 四

これは「下山鈔」に於て大事な問題であり、又事實日蓮教學上の迷ひを惹起した點であるから、私は能く解釋して置かうと思ふ。世間の事でも餘りひどく法に外れた事を言ふて出る者があつたならば吟味しなればいかぬ、殊に極端な悪口などを言つて讒言をして來たのを、少しも調べないでそれを用ひて罪に陥れるといふ事は無い。夏の桀王は比干といふ忠臣の諫を用ひずして、比干が「あなたは斯様な無道の事をしてお居でなれば遂に命は無い」と言つて諫めたけれども、「ナニ」といふので比干を殺してしまつた、その爲めに桀王は湯王の爲めに攻められて亡びた。それから吳の王様夫差といふ人は、彼の西施といふ美人を買つてそれに溺れた、それは越王勾踐が西施といふ美人に命を含めて之れを贈つたのである、吳王夫差は一時戦ひには勝つたけれども、西施の色に溺れて毎日々々宴會を開いて、夜が明けても雨戸を明けてはいかぬといふので、日中蠟燭をつけて長夜の飲をなすと云つて、三日経つても四日経つても出て來ない。それから忠臣の伍子胥といふ人が、箆を着て草鞋をはいて、さうしてその御殿に土足の儘上つて行つた、所が吳王夫差が非常に怒つて、「自分が折角愉快に酒盛をして居る所に、その服装は何ぢや」と言つて叱りつけた、すると伍子胥は「あなたは此處を御殿と思召すか知らんけれども、この伍子胥から見れば草原である、此處はモウ露が一パイ溜つて居る、逆も通常では歩けませんからこの通り草鞋を穿いて居ります、此處はモウ御殿でも何でもありません、あなたが日夜快樂に耽つて

左様な事をなさつて居れば、今に越の國から攻め滅ばされて、吳の國は燒野原となつてしまふ、これは御殿だとお考へになつて居るのは大間違ひであります」と言つて吳王を諫めた、吳王は益々怒つて「不都合な奴ぢや、人の宴會を妨げる無禮者、打斬つてしまふ」といふ「宜しい、私の命は元よりあなたに捧げますが、どうか眼の球だけは残して置いて戴きたい、さうして東の門にこの二つの眼球を懸けて置いて戴きたい、遠からず越が軍を起してやつて來るに違ひない、その時にどういふ有様にこの城が滅びるかを見届けたいと思ひますから、命は差出すが眼の球だけは残して置いて貰ひたい」と言つた。それから吳王は怒りに委せて伍子胥を斬つてしまつて、その眼の球を東門に懸けて置いた、所が程なく戰爭が起つて、越王の軍が攻め寄せて來た時に、この眼の球がグラ／＼と動いたといふ事である。今日葬式の時分に御位牌を持つて行くのに、その上に黒い布片などをかけて行く、あれはやはりこの伍子胥の事から來て居るので、眼の球がグラ／＼と動いてはいかぬといふので、布片をかけて行くといふ事が行はれて居る、これは有名な話で、多少その間には傳説が加はつて居るけれども、兎に角伍子胥は非常な忠臣であつた。日蓮聖人はこの伍子胥、比干の忠節を非常に敬慕して居る、一體お坊さんの敬慕するのは、大抵は佛様とか菩薩様とか、お地藏様とかいふものばかり敬慕するものである、口を開けばお地藏様がどうしたとか、觀世音菩薩がどうしたとか言ふものである。所が日蓮聖人は直ぐに伍子胥とか比干とかいふ君國の爲めに生命を捨てたやうな人の事を言ふ、これが他の坊さんと違つて居る所である、

お釋迦様の事も有難く盛んに説くが、一方直ぐに斯ういふことを言ふ、そこが實に能く消化れて居る、宗教の事も國家の事も文明の事も、裏も表もみな日蓮聖人の頭腦には融合して居つたものである。その伍子胥の諫を用ひなかつた呉の王様は、愈々越王勾踐が攻めて行つた時には、「これは伍子胥のいふ事を用ひて置いたら宜かつたのに」と後で後悔したであらう。又阿闍世王が白癩病に罹り、さうして又自分の國が滅ぼされる時には「ア、提婆達多のやうな者の言ふことを聞いた爲めに斯うなつた」と後悔したであらう。平の宗盛が義經の爲めに生擒れて鎌倉に曝された時、始めて天子様に背いたり、東大寺を焼拂つたりした罪惡を後悔したであらう。何時の時に於てもその通りである、今北條の人々は日蓮を虐めてお居でなさるけれども、今に蒙古が襲うて来て、日本の國上下萬民大騒ぎをする時になつて「ア、日蓮を虐めたのは悪かつた」とその時お氣がつかれるであらう。併ながら正法の行者を虐めて、それが爲めに起る國難であつたならば、逆も他の方法を以つて防ぎ止めることは出来ない、眞に天の譴を蒙むる。その國が悪い事をして天譴を受けるといふ場合になれば、假令鐵圍山といふ大きな鐵の山を以つてその國を取巻き、須彌山といふ大きな山を持つて来てその上に蓋をして、さうしてその國を守る武士は十方世界から四天王を喚び寄せて海際に立て列べさせて之を防ぐとした所が、法華經の敵となり又教主釋尊よりも大事な行者日蓮を忘れてお居でになるやうな事では、その國は助からないと言はれた。この文は實に痛快な文章であります、さうして是れは日本人が一般に忘れてならぬ事であらうと思ふ。假

令鋼鐵艦をどれ程澤山拵へても、要塞を堅固に築いても、その國民が天に捨てられ天祐に見放された時には、その國は亡びるであらう、ひと通りは人間の力であるけれども、最後は大きな力に支配されて居るものに違ひない、それ故に日本人はやはり正義の觀念に戻り、神や佛の思召に耐ふだけの事柄を以つて國に盡して行かなければならない、法華經を捨て、釋迦牟尼佛よりも大事な行者と仰せられた、その者を罪するやうな事があつては、日本の國は保つ譯がない。

此處に「教主釋尊より大事なる行者を」といふ言葉がある爲めに、これに引かゝつて「日蓮聖人は教主釋尊よりも大事だといふのだから、釋尊よりも上ぢや」といふやうな事を言ひ出した者がある、それは所謂俗論、床屋學問といふものである。斯ういふ場合に教主釋尊より大事といふ意味が何處から出て来たかといふことを考へなければいかぬ、大體日蓮聖人は同じ御文章の中に、前來申した通り「如來の使」といふことをハッキリ仰しやつて居る、日蓮聖人は何時でも「釋尊の御使」であるといふことを明言される、他の御文章には勿論澤山あるけれども、この御文章の中にも前に言つた通り「佛の使を輕しむるなり」と言ひ、又「主君の御使なり」「如來の使なり」といふ言葉があるやうに、日蓮聖人はこの御書をお書きになつても釋尊と自分との關係を間違へてお居でになることは少しも無いのである。然らば教主釋尊よりも大事な法華經の行者といふのはどういふ所から出て來るかといふと、これは二つの意味に於て解釋すれば宜いのである、一つは法華經の法師品の中に斯ういふことがある。

一劫の中に於て現に佛前に於て常に佛を毀罵せん、其の罪尚ほ輕し。若し人、一の惡言を以つて在家出家の法華經を誦讀する者を毀謗せんは、其の罪甚だ重し。(法師品)

一劫といふ長き間、佛を謗る罪よりも、一言法華經の行者を謗る罪の方が重い、又偏の所に一切の中に於て合掌し我が前に在つて無數の偈を以て讀ん、是の讀佛に由るが故に無量の功徳を得ん、持經者を歎美せんは、其の福復た彼に過ぎん。(法師品)

一劫といふ長い間、佛を誦る功徳よりも、一言法華經の行者を誦める方が功徳が多いといふ事がある。それはどういふ譯かと云へば、佛様は毀罵られても讀敷られても別に動搖を受けないものである、一切の人が讀敷て呉れるからと言つて、本氣になつて「こんなに讀敷て呉れるならば一つ勉強しやうか」といふやうなことは無い、總ての者が反對をしたからと言つて參つてしまつて「斯う反對を受けるやうでは少し灰色にやらうかナ」……佛様はそんな事は考へ無い、人の毀譽褒貶によつて佛は影響を受けない。けれども法華經の行者は尊いとは言つても凡夫であつて、腹が決つて居らぬから、褒めて呉れば元氣附くし、あつちからもこつちからも毀罵られれば「どうも斯う惡口を言はれては敵はぬ、宜い加減にやめて置かうか」といふ氣になる。そこで之れを受ける方が違ふが故に、一劫の長き間、佛を讀敷るよりも一言法華經の行者を褒める功徳が多いと言はれて居る、その點から「教主釋尊よりも大事な行者」といふ言葉が出て來るのである、それが一つの意味である。それからモウ一つの意味は、前々から言は

れて居る通り、日本は謗法の國なるが故に諸天善神が所を去り、釋迦多寶等の諸佛も見捨て給ふて、最初はこの國を守らうと思召したけれども、日蓮の言ふ事をも用ひず、法華經の教にも從はぬ謗法邪智の國なるが故に、このやうな國は望み無しとしてお見捨てになつて居る譯である(それは國を替める方から)日蓮も「こんな國は見捨てた方が……」とも思ふけれども、併ながら日本に生れた因縁を持つて居るが故にさう言ふても未だ改るかも知れんと思ふて踏止まつて居る、諸天善神は第一に語をつけ、釋迦多寶も見捨て、向ふを向いて御座るのに、尙ほ踏み止まつて日本の爲めに盡して居る日蓮、この場合に於ては日蓮が特に日本の國に取つて大事な譯である、その日蓮を迫害するといふことは、釋尊よりも大事な日蓮を迫害するものであると言はれるのである。是れは恰度息子が放蕩をして親父から見捨てられて終つた時分に、叔父さんが世話をして居る、その叔父さんが息子に意見をする時の言葉見たやうなものである。「お前はモウ家は勘當されてしまつて、親父にも見捨てられ、阿母にも見捨てられ、兄弟親類誰も世話をして呉れる者が無い、それでもこの叔父一人が、さう言ふてもマア了簡が直るかと思ふて今迄世話をしてやつて居るんぢやないか、その叔父の頭を叩くといふのは何事であるか、今の場合に就いて考へて見ろ、お前の親よりもこの叔父の方が大事ぢやないか」といふやうな場合に出て來る言葉である。是れが通例の場合に、何時でも親よりも叔父さんの方が大事ぢやとか、叔母さんの方が大事だといふ譯のものではない、その場合に當つての一時の言葉である。佛にも見捨てられ、神にも見捨てられて居るこ

の日本、日蓮も最早や駄目かとは思ふけれども、この國に生れた因縁、愛國の精神あればこそ見捨て兼ねて、どうぞして……と思ふて居るその日蓮を迫害するとは何事であるかといふのである。之れを持つて行つて宗教の根本の問題の本佛と本化の關係にまで及ぼして、「教主釋尊よりも大事の日蓮」といふので之れを振り廻して、お釋迦様より日蓮が偉い日蓮が偉いと言ふて廻らうとするのは飛んでもない間違ひで、所謂俗學俗説といふものである。こんな者が法華宗の衣を着て坊さんちやナンといふて大きな面をして居るから困るのである。丁度今の極道息子に意見をする叔父さんが「親よりも大事なこの叔父」と言つた言葉を、學校の教科書に持つて来て、「親父よりも親類の叔父の方が大事である、親孝行ナシでそんな事はどうでも宜い、叔父さんを大事にしろ」といふ事に教科書を作り替へてしまはうとするそれは大馬鹿者と言はなければならぬ。併し本気で研究せぬと分つた事でも判らんものぢや、まさかになさう大勢の者が馬鹿ばかりでもあるまいけれども、本気でやらんものだからそんな所に引かゝるのである、この點は諸君に於ても十分研究をして、正確なる考を持たれるやうに希望する次第である。



釋尊と日蓮聖人 (上)

和賀義見

大聖釋尊の降誕は、實に人類最高の理想を明らかにし、人生究竟の意義を物語る最大の福音であらねばならぬ。

釋尊の出世に依つて、一切の人類は人生の價値を最も適確にし、そして又如何に生くべきかの道を示されたのである。人類最大の恩人こそ我が世尊にましますのである。

釋尊は、今を去ること三千年、中印度に御降誕遊ばされた。

北にヒマラヤの峻峰峯々として聳え、南に渾々たる諸川ガンジスの河に注ぎ、土地豊かにして、五穀に恵まれたる迦毘羅衛の城は、當時印度に於て最も名譽ある種族として自他共に許したる日種の族、甘蔗王の裔に依つて經營せられた。嘗て仙人カピラの

修業したる事に因んで迦毘羅衛城と呼ばれたのであるといふ。釋尊の父は淨飯王と呼ばれ、母は同じ釋迦族たる拘利城の長者阿索釋迦の女、摩訶摩耶その人である。摩耶夫人は、當時の風習に依りその生家に歸り出産せんとして途、嵐嵐尼園に於て俄かに産氣づき、咲き亂れたる無憂樹の花叢郁たる間に於て太子を擧げさせられたのである。夫人は拘利城に行かず、直ちに王城に歸られたが、太子生後七日にして崩御遊ばされた。

太子は名を悉達多と言ひ、御叔母婆闍婆提夫人に育てられた。初め太子が降誕せられたる時、阿私陁仙は之を奏して「若し世間に在れば轉輪聖王となり給ふべく、出家せられたならば必ず佛陀となり給ふであらう」と豫言した。

天上天下に唯一人不滅の光を放ち給ふべき萌芽は已に誕生の時に具はつてゐたのである。

既に八歳にして毗奢密、忍天について文武兩道を學ばれた。文は五明、四吠陀のそれである。五明といふのは聲明(歌を以て人を教化すること)、巧明(工藝美術を以て教化すること)、醫方明(醫業の道に依りて教化を助くること)、因明(正しい論理の筋道を迫つて教化すること)、内明(宗教の學問)であり、四吠陀とは梨俱吠陀、偃馬吠陀、耶柔樓吠陀、阿答樓婆吠陀等の諸經である。そして太子の武藝に至つては、實に當代無双であつたのである。斯くて文武兩道に比類なき太子は十七歳にして、月の如く聰明にして麗はしい拘利城主須婆提の女耶輸陀羅姫を入れて后となし、一子羅喉羅をもうけさせられたのである。

二

古來婆羅門には、一身上に四期を分つ習があつた一は梵思期(習學期)二は家長期、三は苦行期、四は思辨期である。此の四つの順序を踏んで婆羅門の所謂仙人生活は許されてゐたのである。

悉多太子は、あらゆる人生の歡樂の條件を具有し

ふ所に馬を進め羅摩村に到つた。馬より降りた太子は車匿を慰めて、「汝車匿よ世に僕使ありと雖も汝の如きは希有希得である。よく恭敬孝順好心に仕へて呉れた。今自分が聖王の位を棄捨するのは決して他を畏るゝ爲の故ではない。唯だ解脱を求むる爲の故である」と仰せられ、更に愛馬乾陟の頂を撫で、「汝泣くこと莫れ悲しむこと莫れ、今自分が阿耨多羅三藐三菩提を求めんとするのである。後に於てその證を得た時は當に甘露を以て分つて汝に與ふるであらう」と言つて之を勞はり、別れの言葉を述べられた斯くて父王、婆提夫人、耶輸陀羅姫乃至諸臣に對する訣別の辭を托し、勇氣凜然として衣を脱ぎ袈裟を着して沙門となられたのである。之より太子に代ふるに菩薩の名を以て呼び奉ることにする。

三

菩薩が行路に徐行し給ふ姿は眞に偉風堂々たるものがあつた。假令人が之を尋ねても默然として答へ給はないので彼の人々は釋迦牟尼の名を以て呼んだのである。

それより苦行仙と稱せらるゝ跋伽婆仙人を訪ねた

てゐたのであるけれども、人生何人も免かるゝことの出来ない生老病死の諸苦に思を致した時、あらゆる生類の免かるゝことの出来ない運命を悲しみ、此等の諸苦を解脱すべき道を深く考へらるゝに至つた。

農圃に傷付ける虫が忽ち小鳥の啄ばむ處となつた無常鬪争の事實は、更に老病死の傷々しい相を展開して太子の心を痛ましめたのである。太子城外に遊ばんとして一日東門より出づれば老者を見、一日南門より遊び給へば病者に會ひ、一日西門を選び給へば葬送の悲しみに會せられた。斯くして深き憂に沈まれたる太子は、北門に於て一沙門を見、老病死を離れて永遠の生命に生きんとする出家の生活を志すに到られたのである。

既に今は一子羅喉羅を擧げて家長期の後繼者を作る責任を果された。太子の求道心は益々熾烈になつて遂に出家すべき時期は熟したのである。愛馬乾陟に跨り馬丁車匿を勵まし「決定して我今時至れり」と中夜ひそかに王城を出で眞實に恩を報せんが爲の故に覺の門出に上られたのである。翌朝彌尼迦と言

遙かに見れば或者は斷崖より身を投じ、或者は毛髮を抜き、或者は食を斷ち、屍累々として諸鳥の啄ばむ處となり、白骨原野に曝され慘として見るに忍びないものがあつた。

「若し身を苦しめて福が得られるとならば野獸の類は大福を得るであらう。羊を殺して神を祀り他の生命を奪つて自己の幸を願ふが如きは之非眞理を行じて眞理を求めんとするものである。肉體は心に依つて動くものであるから、肉體を苦しめるよりも先づ心を調へなければならぬ」と仰せられて、跋伽婆仙を捨て、道を進め王舍城附近に阿羅邏仙を訪ねさせられた。

阿羅邏性は伽藍氏と言ふ、菩薩を見て大いに喜んで之を迎へ「至心を求めんとする仁者は眞に大法の橋となつて衆生を渡すに耐ふる大器である」と言つて有處無處の説をなした。菩薩は阿羅邏の説法を聞いて之を受持し勤め行つて幾何もなくしてその説く處を體得せられた。

然し乍ら菩薩は此處に二つの問題を提示して阿羅邏を驚ろかすのである。それは業と身命と何れが先

にあつたかの問題がその一つである。「彼の世間に因果の道を説く處を聞くが如く我々が此の人生に受くる處の境遇なり心身はそれは業に依つて齎されるといふ。果して過去の業因に依つて受くるのであるといふならばその業因は誰が作つたものであるか、又業より以前に身命なるものがあるとならばその個性を帯びたる生命を誰人が作り齎したのであらう」即ち「業を作るのは誰か、生命を作るのは誰か業が先にあつて身を作り爲したのか、それとも身が先にあつて業を作り爲したのか」此の問に對して阿羅邏は之は大患なりと言つて答へることが出来なかつたのである。菩薩は更に二の問を放たれるのである。「若し劫盡きて天地毀たれ須彌山崩れ、山川草木盡く焚燒せられたらば大梵帝釋乃至その宮殿も燒き盡さるゝであらう。若し逃るゝ處があるとすれば何れの處であるか」と急所を指されて阿羅邏は遂に沈黙して了つたのであつた。

菩薩は斯くの如く當時最高の理想を持つてゐた數論師などの因果觀の不徹底を見破つて遂に後年佛教独自の因果觀を打ち立てらるゝに到つたのである。

それより鬱陀羅摩子を訪れたけれども彼羅摩子は非相非非相の説を提唱して父の説を述ぶるに過ぎなかつたのである。何等自ら體驗せるものを以てせざる限り聞くべき資格がないとして之を捨て愈々般茶婆山麓に於て修業せられるのである。

一日蓮の葉を持つて王舎城外に乞食せられた時摩伽陀國王頻婆娑羅王はその偉風堂々たるを見て般茶婆山の勝林中に精進これ勤めつゝある菩薩を訪ね、「何故に出家して勤勉精進せらるゝや、若し仁の國迦毘羅衛城を以て小なりとせば此の摩伽陀の國半ばを以て獻上せん、若しそれを以て尙不足となさば兵從を率ひて四天下を征服し轉輪聖王となり給へ」と奨めた時に菩薩は嚴然として「婆伽邏龍王は牛蹄の水を求めず」と答へたのである。その世俗に歸るべしと言ふ勸告を斥けて更に進んで伽耶尸梨沙山に赴かれ愈々精進修業せられた。「はからざりき菩提の使に接せずして生死の使に接せんとは」と切なる父王の使を斥けて愈々志は鐵よりも固く金剛の如くであつたのである。

然れども肉體は衰へて最早立つ能はざるに至つた此の儘肉體が倒れては無上正覺を成就することが出来ない。此に菩薩は大いに覺る處あつて、尼連禪河に身を淨め優婁頻累村等に清淨の童女の捧ぐる美好の食を得て營養を恢復せられた。父王より遣はされたる憍陳如等五比丘は之を見て菩薩は修業の志を捨て、墮落したのであると誤解し菩薩を捨て、波羅奈に去つた。

(續)

斯くて菩提樹下に赴かれたる菩薩は修業すること六年、内魔外魔を降伏して御年三十(或は三十五)臘月の八日、明星の輝く時正念正智を成ぜられ、法界は如來證得の大理想の光明に輝きわたつたのである。

只今がクリーニングの絶好期

移りかわりの御名物は汚れたまゝ、お仕舞ひになるとお品を損じます

小峰洗染所

小傳馬町三丁目五ノ三
電話浪花 四一八

(御報参上)

本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語錄 改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共
 - 一 日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢
 - 一 法華經要義 賜天 全 金貳圓五拾錢 覽
 - 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
 - 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
 - 一 佛教の本質と其價值 全 金貳拾五錢
- 以上施本用として多數の御注文は特別割引仕候

磯部滿事謹輯

一本多日生上人

特價 金壹圓七拾錢 送料共

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團 法人 統

一團

振替東京九四二〇番

日什正師諷誦章講話 (其三)

梶 木 顯 正 述

九、涌出品ノ説相ヲ明ス

次ニ止過八恒沙之弘經ニ召ニ本化寂光之地涌ニ因ニ彌勒不知之疑問ニ顯ニ釋尊久成之遠本一

この文は法華本門段の初めの涌出品の心を指して云はれるのである。この涌出品の前半「汝等自當ニ因是得聞」までは本門段の序文であつて「爾時釋迦牟尼佛告彌勒菩薩」より以下は本門の正宗文である。釋迦如來はこの品へ来て愈三十成道の御自身を「汝等十九出家三十成道の佛であつたと思ふて居たであらうが實はさうではない、其の證據には大昔に已に我が弟子と成つて居る者があるのであるから、汝等はその誤つた念を改めねばならぬ。今その本化の老弟子を此處に呼ぶが故に其の疑念を晴すべし」と白髮の老比丘四人（四人とは上行、無邊行、淨）をお召し寄せになつて、汝等老弟子！とお呼びになる、この老比丘達は已に大昔に釋迦如來の教化にあづかつて弟子となつた人々で、それを以つて釋迦

如來の久遠の佛に在すことを證明し給ふのである。されば日蓮聖人は「涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり」と仰せられるのである。「過八恒沙」とは無數といふことで、印度の有名なガンヂス河の砂は無數であるが、更にその無數のガンヂス河の砂を八倍した程の無數の人、といふ意である。それ等無數の人達から後の末法惡世に弘經普願を申出られたけれ共、釋迦如來は「汝等の堪へ難い處である」と止め給ふて、本化白髮の老弟子を召し出された、それは信仰決定して斷々乎として退心なき方々であるが故である。前にもいふ如くこの菩薩方を本化の菩薩と云ひ前の無數の菩薩方を述化の人といふ、本化とは本からの弟子といふ意、述化とは途中からの弟子と云ふことである。如來はこの方々に末世の弘經を托し給ふ、されば一會の大家は「乃不識一人」とて未だこの内のお一人をも見知つたことが無いので、述化一會の長老を代表して彌勒菩薩が一同の驚きを如來に問ひ奉るのである。この一段を古來「動執疑の一段」と云ふ、又は「略開近顯遠の一段」ともいふ。「寂光之地涌」とは（前に出す）地涌とは何人も知らぬ人々であるから地から涌いたと云ふ言葉を用ひてその意を現はしたのである、そこで如來は壽量品に這入つて嚴かに天地法界の一切衆生に向つて「我レハ久遠ノ本佛ナリ」と一大宣言を發表し給ふたのである。同じ佛教徒の中に於て阿彌陀が本佛だの、イヤ本佛は大日だ、イヤさうではない妙法が本佛だ、などとお經にも無い事をいふのは皆嘘の皮である。それ等は皆こしらへ事である。これは各自注意をせねばならぬ重要な點である。

十、壽量品ノ説相ヲ述ブ

宣三身即一之應用ニ顯ニ塵點久遠之大悲

この段は佛教の中心教義にして法華經の神髓たる如來壽量品の内容を説示し、宇宙の救済主久遠の本佛如來を見せしめ給ふのである。「宣三身即一之應用」と云ふ三身とは、佛様の内容に就て云ふので、教主如來の大慈悲は始めなき始めより終りなき終りまで、三世を貫いて徹底的に衆生を救ひ護らうと働いて御座る、と同時に御智慧は又三世を昭々として照してお在になり、その大慈悲の無限なるを一身と見、大智慧の徹見し給ふを一身と見、その智慧と大慈悲の二ツが大御人格の上に融和發現されてお働きのなる所を一身と見、以上の三を功德體たる釋迦如來の一身の上に見奉るのである。その智慧、慈悲活動の三が即ち一ツとなつて迷へる衆生を永遠にお救ひ下さる佛様を即一之應用と呼び奉る。

それは三世を貫く無限の壽命體を持つてお在になりながら、衆生救済の爲に假りに有限の姿を以て御現はれになるを指して云ふので、釋迦如來がそれであると云ふ意味を現はした所である。「塵點」とは非常に數の多いことを云ふ、幾千年といふ長い年月を経た古い昔し、遠い過去からの大慈大悲が釋迦如來と云ふ慈悲體となつて顯れ給ふたを即一之應用といふ、之れを宣示されたのが壽量品で、この事を

古來「應身爲本」と云ふ。前の開近顯遠に對して之れを開遠（述云ふ意）顯本といふので哲學上の語で云ふならば現象即實在と云ふことである。壽量品はこの意味を徹底的に説き切つたものである。如來の大慈悲が三世に溢れて居ればこそ此の御活動があるので、若しこの佛様が三十にして佛となり八十にして入滅し給ふてそれで後は終ひで佛様は在まざる、といふのであれば佛敎は生命を失つたものであるれば、日蓮聖人は、

一切經に法華經在まざるば、法華經に壽量品在まざるば山河に珠なく人に神のなからんが如し……
 こそへ仰せられて居る、而かもこの佛様は娑婆世界を中心として三世十方に廣大なる慈悲を以て幾多の姿を示現して救ひを垂れ給ふ。日蓮聖人は又

壽量品の佛の天月暫らく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らずして、或は入つて取らんと思ひ、或は繩を以つてつなぎ留めんとす……
 と、久遠の釋迦如來を知らざる全佛敎徒に對して一大警告を與へられて居る。

更に以上を壽量品には譬へに寄せて説かれてゐる、譬へとは斯うである。一人の良き醫者があつた、その人には多くの子供があつたのである、或日その父は所用の爲に他行せねばならぬこととなつたが、その不在中に子供等は藥局へ這入つて藥を滅茶苦茶に飲んだ、爲に藥に當てられて重い者は本心を失ひ軽い者は悶え苦しんで居た、父は何心なく歸つて來るとこの仕末であつたから狂氣の如くに驚き且つ悲

んで、直ちに苦惱を癒す良薬を調劑して、子供等に與へた爲に病の輕い者は服用で苦しみを除くことを得た、けれ共重い者は飲む事を望まない、と云ふ譯けである。其處で父は考へた、「父は再び他所へ行かねばならぬ、お身達は早くこの薬を飲むがよい、服ば必ず癒るから……」と言ひ残して再び他行して終はれたのである。そして行先きより使を立て云はしめるには、お身達のお父さんは今日不圖も俄に旅先で死なつて了はれたよ、と云ふのである。子供等は餘りにも突然な報らせに夢の如く驚き且つ愁しんで答へる術も知らぬ有様である、子供等は泣いて父の訃報を悲しんだ、私達は父なし子と成つて終つたのである、孤兒となつて了つたのである。お父さんがおるでに成つたら、斯うもして下さつたであらう、あゝもして下さつたに違ひない、然しお父さんは今はこの世の人ではないのである、せめてはお父さんが行かれる時に残し置かれたアノ薬を飲んで早く苦惱を癒やさねばならない、と一同が父の残し給ふた薬を飲んで病を悉く癒やしたのであつた。すると其處へ戀しい父上はヒヨククリ元氣なお顔で歸つて來られたから皆は更に驚いたのである、夢に夢見る心地で父を相擁して喜んだのである。

その父、良醫とは、久遠の本佛釋迦如來であり、子供等とは吾等衆生であり、良薬とは妙法五字である。汝等人々よ、父良醫の方便の手段は罪惡であるであらうか、否やと如來は問ひ給ふ、大衆は否々世尊！ いかで罪惡と云ふを得ませやうや。如來は靜かに説き給ふ「我れ釋迦牟尼も亦々斯の如し、今久遠の我身を秘して暫らく衆生濟度の爲に年若い姿を汝等の前に示したのであつた、實を云へば久遠の古佛釋迦牟尼であるのである」と、今この譬の中に明し給ふが如く有限の中に無限の本佛實在を顯示し給ふは一代佛敎中法華經の權威とする處である。これが當壽量品の大略である。

十一、分別功德品ノ説相ヲ述ブ

校ニ量 一念信解之功德

この一段は分別功德品の大意を擧げられたのである。上に説く所の壽命の長遠なる久遠の釋迦如來を顯示し給ふを聞いて信受するならば、其功德は廣大にして必ず佛と成ることを得ると説かれ、菩薩の行に比較して、「一念信解」と云つて、凡夫である吾等衆生の一念（一念とは刹那の）に信受し領解するならば其功德は深大であると云ふ、「校量」とは比べ量ること、勿論「持つ」といふことが根本條件である。末法惡世の今日の人々は先づ第一に人間の位も低く智慧も淺い、然も愚痴の凡夫であるから正確なる信解は仲々困難である。漸やく聞いて隨喜（ヨロコブ）する位が程度である。末法の今日如來の敎を信受すると云ふ如き人は稀れで、時代の上からそれを信じ持つ衆生は尤も勝れて居る者である。例へば聞いて喜ぶ丈は喜ぶがそれを行ふ力は持ち合せない、即ち感心上手の行ひ下手と云ふ者は、それを行ふ人に比べれば劣つて居る、が然し末代今日の人其行ふ氣力を持たぬ、所謂感心上手の行ひ下手許りであるが、

時代が已にさうした時代であるから菩薩の行を修する人に比べては、今日は一念信解の行人は功德が勝れてゐると説かれるのである。末法今の行人は「名字即の位」といふのはその謂であつて、言はゞ時代の低下せることを意味したものである。

十二、隨喜功德品ノ説相ヲ明ス

述歎轉展隨喜之勝利

これは法華經第十八隨喜功德品の大意を述べたのである。當品に於ては前の分別功德品に説かれたる隨喜の功德を、更に譬へに寄せて強調し給ふのである。若し惡世末法に是の法華經を聞いて隨喜し、それを又他人に語り傳へた所が、其聞いた人が亦それを喜んで人に語り傳へ、斯くの如くにして轉展して第五十人に及んだとする、その第五十人目の人の隨喜する功德でも猶未だ甚だ深大である。若し菩提心の厚い金満家があつて、世界中の衆生に八十年の間その望む處の物を恵み與へ、教へ導いて悟らしめたとする、その大長者の積んだ功德よりも、今の第五十人目の人の功德の方が、百千萬倍勝れて居ると如きは説かれるのである。即ち法華經を受持し信行する者を讃め給ふたのである。

十三、法師功德品ノ説相ヲ明ス

明六根互用之勝徳

この一句は第十九法師功德品の大意を述べられたので、「六根」とは眼と耳と鼻と舌と身と意の六つを云ふ。根とは根本としてといふやうな意味で凡て人はこの六つを基として語り、行ひ進めてゆくが故に名けた名である、如來がお仰しやるには此の法華經を受持するならば、如何なる者でもこの六根が清淨になり、各々六根の上に微妙の功德を積んで終ひに肉身の上に、人格完成の勝徳を具するに至る旨を明し給ふ。之れ即ち教彌大なるが故に位彌低しといふ行淺功深の經功を示されたもので、三毒愚痴の末代吾等にとつては、眞に喜びとも喜ばしい限りではある。(次續)



日生上人を憶ふ

(其九)

本多上人の追憶

在伯國 武田 三三

大正七年盛夏の候、當時横須賀の海軍技手養生所長たりし岩野大佐が見えられて、自慶會に賛同入會を勧められた。當時筆者は三千の職工に長として人心の統一に苦心焦慮の折柄、即時賛意を表して一ヶ月二回の講演を御願ひする事にした、第一回の講師は本多上人であつた。

大戦以來日本の工業は十倍以上に發達し、勞銀は物價と共に正に三倍に昇り、職工の平均月収は百圓と註せられた、職長級に至つては六百圓を下らず、縣知事糞喰へと言ふ有様であつた、一日職長某が來

ての話しに、吾等の給料は最早十二分でありすが何分にも頭の中が蒸發し盡した氣味で、朝から晩迄不安を以て充たされて居るのは如何なる譯でありませうか、何とか一つ安心の出来る方法を講じて頂きたいとの事であつた、好機逸すべからず、早速御願ひに及んだ次第である。

上人の講演は題して「相互の諒解」と言ふ、説き去り説き來る一時間全く明快其物であつた。翌日工場を巡つて見ると落書がしてある、曰く「本多日生は大正の日蓮也」蓋し蒸發したる頭に一陣の夕立をあびて蘇生の感があつたものと思はれる。爾來三年間諸先覺の講話を拜聽した次第であるが、大部分は上人の擔當であつた、願れば講話其物は大概忘れて了つて居るが、上人の音容に接して人格の感化を受

けた方が多かつたと思ふ。先づ第一番の點として今に肝銘して居るのは上人の勿體ぶらぬ態度である、是は中々凡物の出來ぬ所として今に至るまで上人に眞似んと心掛けて居る。

上人の性格は簡潔明快で盡きて居ると思ふ、既に諸先輩に依つて上人の特長は多々擧げられ來つて居る際、茲に寧千慮の一史的逸事を記載して見るのも亦追憶の一片であらうかと考へる、明治三十年の内地雜居に對する心得として、文部省であつたか内務省であつたか、から平松理英師を各學校に派遣して佛教を尊信すべき講話を爲さしめた事があつた。其講話中に平松師は釋尊は王者の太子で基督は大工の子である云々の話があつたが、是れは蛇足であると思ふ、或日上人に此話をしたら、上人の申さるゝには成程左様の文句は言はぬ方がよからうとの事であつた、暫にして上人の講演に釋尊一代記があつた折、釋尊の生立を述べられて、父は淨飯王母は摩耶夫人、基督の生立とは同日に論すべからず云々と申された。

大正九年五月廿三日の朝、七十四銀行が五千萬圓

の大穴を明け、茂木商店と共に没落せるを皮切りとして、没落又没落、大正十年七月を以て吾等も亦植花と凋落し、翌年十月筆者は三重縣鳥羽に移つた、一度上人の師々吼に接し度く、御出馬を願つた所、岩野閣下と共に氣輕に御出掛け下されたのは大正十三年三月であつたと思ふ、之を最後として筆者は三重縣山田に引退した、三重縣は製糸の産地であつて東洋紡績の勢力範圍であり、津の工場長益子君が同窓であつたが爲めに、一度上人の講演を拜聽すべく勸告の上、早速上人に御願ひした所、此時も亦至つて氣輕に御出掛を得た、時は大正十四年の夏であつたと思ふ、山田と津と四日市の三個所に四回の講演を續けられ、四日市で御別れしたのが今生の最後であつた、津の工場俱樂部に御一泊を願つた折益子君の依頼で、一幅に達筆を揮はれたのが筆者が、拜見しても稀に見る雄筆で、上人も亦快心の出來榮と申されて居つた、猛虎嘯巖頭の一句があつたと記憶して居る、四日市に於ては安樂寺の權越山地氏の御厚遇に預つた。

筆者は會津の産である、戊辰の役に郷土流落して

親戚故舊は皆北海道に移住して居る、更に大正元年英國に遊び戦時中滿洲及露領に使用して稍々海外を視る機會を得た、願れば戦後の不況以來約三千の職工を斬首して居るが、職業柄とは言へ、是は餘り善根とは申されぬ、一つ此際海外に移住して、小にしては子孫の計、大にしては邦家の計を成すべく意を決した、岩野閣下は一つ銀座街頭に托鉢して大道説法を試みたら如何との御話であつた、本多上人の御返事には少々消極的であるとの御批評であつた。

昭和二年二月愈々出發の前二日、京都の大本山妙満寺に於て、上人の命に因つて特に法要を營まれ、細野、松田兩閣下の御列席を得て、吾一行を送られたるは、終生忘るべからざる感激であつた。

明治四十年以來約十萬の出稼移民と、大正六年以來約六千の土着移民とをブラジルに送り出して居るが、出稼移民は元々經濟本位であるが故に、精神的文化的方面を除外すれば、先づ相當の成績を擧げ來つて居るものと觀るを得べきも、土着移民の方は、精神的、經濟的兩つながら疑問である、僅に六千の移民を土着せしむるが爲めに約二千萬圓以上の國幣

サンパウロ州に投下されたものであるが、此外に山科氏の名によりて着手呼號せられたるパラナ殖民地、更には今も母國人が空想を走らする、アマゾン殖民地(南米拓殖、アマゾン興事、アマゾン産業研究所、アマゾン開拓青年團)に至つては幾十萬幾百萬の邦貨を投じたものなるや、全く不明であるのみならず、比較的豊富なる資力を有し福原氏が首長として、自ら移住せる南米拓殖を除く外は、殖民以來僅に二ヶ年にして、幾百町歩の開墾地を草藪と化し、生産は皆無にして殖民は四散し、纔に踏み止まれる者は、母國よりの送金に依て露命を繋ぐ有様である、此不良なる經營の罪は誰に在るか他日の問題として、今上人を追憶するに當り、知法思國の士は慈悲の菩薩行より、當路の士は國策の上より一考を拂はれん事を願望する次第である。

今日澎湃たる母國の人口問題は、人をして他を顧るに違あらざらしめたるが爲めに、斯る現象を生じたるものであらうと思はれると共に、如何にも不合理千萬であるの一證として、數字を以て之を顯はして見やうと思ふ、假に殖民開始以來の投資を二千

を投じて居るが、其三分の一は土地代、三分の二は經營生活費、而して生産は自給に足らず、約百萬圓の負債に對して金利一割二分、今後十年にして元利三百萬圓の殖民債務は、今の所先づ返済不能のものと認められて居る、從て殖民は流離四散して定着せず、舊を送り新を迎へて徑に殖民地の空名を掲げて居るに過ぎぬ、是は國策上面白からざる經營と認め屢々上人を煩はし當路の一考を喚起せるに對し、上人は毎々に其勞を取られたるのみならず、一々丁重なる御返事を賜りたるは、誠に感佩の至りであつた凡そ移民に對しては日本政府の補助あり、ブラジル政府の補助あり、加ふるに昨今は出發仕度金まで政府より支給して居るとの事であるから、極端に言へば無一文にて移住し得る譯であるが(其實日本移民の富裕にして人品の良質なる事は世界一である)殖民に至つては全く費用倒れである、先づ一戸を日本より殖民するが爲には官費、公費、私費、合せて約一萬圓を費して居る、今後前賢未發の名案を以て經營せざる限り、先づ既成殖民地は立ち行くまいと思はれる、既に述べたる二千萬圓の國幣は主として、

五百萬圓と見て、此資金を以て海外移住信託會社又は團體を設立したりとすれば、一年の利息は百七十五萬圓、此半額を以て開墾費、居住費、公共設備費とし、半額を以て移民の生活費とすれば、優に二千二百戸、一萬の人口を衣食せしむるに充分である。尙毎年五十萬乃至百萬圓の生産は擧げて純利と爲る過去に於ける斯の如き不合理は、一には基金制度に依らざりしが爲に、二つには經營者たる中間會社又は團體が年々政府の補助を獲得して、其從業者を養ふに愚なるが爲に發生したる結果に外ならぬ、政府より見れば巨額の補助であるが、殖民より見れば何等の恩恵も感ぜぬ、茲に上下隔絶して知法思國の信念を壞害する事、甚だしき事實を見るは痛歎の至りである。曾て北米に於て排日問題起るや、移民は政府の弱腰に憤慨し幾多の無政府主義者を生じて居る親の心必ずしも子知らず、北米の場合并に日露講和條件の如きは一般國民の満足を買ふ事能はざりしは已むを得ざりしものであるが、竊て此殖民補助費に至つては、全く効果を擧げて居らぬ點が今後改善の主眼であらねばならぬ、更に國際的結論としては世

界各先進國の殖民史より觀て自國勢力の及ぶ範圍外に殖民するは成功覺束なきものと思ふ、昨今流行語に於て前者を食民事業、後者を放民事業と稱するは必しも無意義とも申されぬ次第である。

上人遷化の報に接したのは一昨年五月中旬であつた、五六の同志を會して聊追悼の微意を表した次第であつたが、願れば上人が消極的であると批評せられたのは如何にも御尤の様に思へる、殖民事業は聊食民事業であり放民事業である今日に於ては格別積極的な何物をも發見し得ぬ點が甚迷惑であると共に今後共研究奮勵致すべき所と思ふ。坊間の營業者はよく立志成功傳を以て人心を挑發するは聖徳太子の所謂一二を捨て、千萬を取るに反する外道であると思ふ。一個成功者の蔭には萬千の失敗者あるは菩薩行とは申されぬ。世界の寶庫たるブラジルに衣食給せざる殖民あるも、亦聖代の不祥事である、其効果たるや、曰く家賃、水道、電燈、瓦斯代の不用なる事、着物の不用なる事等々を挙げ得ると共に、子弟教育も亦不能であるに至つては効果全く消極的である、而も母國幾萬の同胞はアマゾンに以て無限無際

の寶殿と信するであらう。寶殿は則寶殿であるが、方便品を没却して一擧無量壽を得んとしたる所に大なる間違を生じたものである。換言すれば知法思國の信念無き人々が事業を經營したる結果に外ならぬ故國今や上下を擧げて亂舞の時、國士を以て任ずる者は宜しく三風十愆を排撃して上下疎通し、官民相親しむべく、七寶莊嚴の多寶塔は必ずしも之をアマゾンに求むるを要せず、我が此土は安穩にして天人常に充滿し園林諸堂閣種々寶莊嚴せり。

南無妙法蓮華經。

昭和八年三月十六日、聖應院日生上人第三回忌御法要に際し、神戶立正寺に於て爲されたものなり。

井上 猛
野崎 新之助 筆記

追憶感話

本日は本多日生現下の第三周忌の御命日に相當する有難たい日であります。私も本多現下のことに

いては、平素懐いてゐる感想の一端を御話し申上げて、御報恩の志の幾分を満足せしめたいと思ひます申すまでもなく、本多現下の御徳は、實に廣大無邊であり、到底私共の能く讚歎し盡せるものではないので、これから御話しいたしますことは、その御徳の大海の一滴に比すべき程のものと思ひます。

私は本多現下が如何に高德の善知識であらせられたかといふことを申述べるについて、法華經の法師品第十の經文を拜誦して、その御文を通じて御話し申上げてみたいと思ひます。一寸御斷りして置きますが、私は本多現下より個人的に親しく御辭を賜はる杯の光榮を有したこともなく、單に壇上に於ける說法者としての本多現下の御人格と、それに對する印象なり感想なりを一拜聽者たりし私が申上げる譯であります。

法華經法師品にかういふ御文があります。これは皆様の御承知の有名な文句であります。

『是の人は大信力及び志願力諸善根力あらん。當に知るべし、是の人は如來と共に宿するなり、即ち如來の手をもつて其頭を摩でらるゝことを爲ん』

大信力とは即ち法華經如來壽量品に於て顯本されたる久遠實成釋迦牟尼佛を本佛として信仰し奉る、本佛釋迦牟尼佛を我等の御師匠様とし、御親として、(精神的)御主人として歸依渴仰の精神をもつてゐる人、さうして自己については、我等は本佛釋尊の愛子であり、弟子であり所從であるといふ自覺をもちさうして本佛釋尊を家長とし、我等はその家庭の一員である。本佛釋尊によつて護られ導かれて居るといふ一大家族主義の信念に安住してゐるものを、すなはち大信力ある人と言へるのであります。其他の信念に住してゐるものは、大信力ある人とは言へない、小信力ある人であります。で、本多現下は誰が見ても正しく大信力ある人と言はねばなりません。本多現下は、御一生を通じて、釋尊の絶對を説ききつて居られた御方でありまして、大信力に安住して居られたことは、もうあり／＼とわかるのであります。如何なるものが現はれて來ても決して釋尊の絶對の尊さ、有りがたさを横切るものは無いことをはつきり認識されて、これを極力主張せられてゐられたこと、思ふのであります。

次に、志願力あらんといふ、志願力とは、志とは志しであり、願といふのは志のもう一層徹底したものが願であります。志を立て、それを貫かすんば已まぬといふ一種強烈な持続的念力を指して願といふのでありますから、この志願力は寔に尊いものであります。而してこの志願力は、やはり大信力を受けて起るものであらうと思ひます。

神力品に、『日月の能く諸の幽冥を除くが如く、是の人間に行じて衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしめん』

と説かれてありますが、この一段が法華行者の志願力ではありますまいか、無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしむといふ一大目的観であります。即ち言ひ換へれば開顯統一主義の一大目的であります。本多現下は統一開を創立せられて、この大目的を達成すべく、そこに旗幟を鮮明にせられて居るので、それが御一代を通じて一貫せる特色を發揮されたことがまさしくこの經文に契當しては居りますまいか。次に、諸善根力あらんといふのは、この大信力志願力に導かれて、そこにいろ／＼の活動として現は

れてくるわけでありますが、本多現下は、實によくこの善根力を遺憾なく發揮された御方であらうと思ひます。講演に、著述に、其他あらゆる方法をもつて國民教化のために一生を捧げて御奮闘遊ばされたのであります。講演せられたその法筵の度数が壹萬何千と稱せられて居るので、その一事から見ても絶倫の御活動振りが窺はるゝのであります。假に一日一回として、一日も御休みなく、講演されたとして壹萬回としても實に二十七年と八ヶ月餘であります。

その外に、法華經講義が上下二巻、聖語録あり、開目鈔の講義あり、大藏經要義あり、等々これら等身の御著述も、まさしくこれ大信力、志願力に基づく御精進の結晶であります。述べ去り述べ來れば、本多現下は實に大信力、志願力及び諸善根力あらんてふ經文そつくりの御方であらせられたので、『即ち是の人は如來と共に宿するなり』いかにも本多現下はさういふ感じの深い御方であらせられました。

本多現下は、誰と最も酷く似て居られたであらうかと思ひますと、ある點に於て、宗祖と一ばんよく

て居られました。

佛様の慈悲大悲の御方であらせらるゝことは、申すまでもなく、本多現下は圓慈觀を力説されて居りましたが、佛様の智慧のすぐれて居らるゝ點を必ず併せて御讃めになつてゐられました。

法華經方便品に『方便知見波羅密皆已具足』とあります通り、如來には權實二智を有せられまして、宇宙の實相を了知する、智慧を如來の實智といひ、その實相に照らして衆生を救ひ給ふ方便の智慧を權智と申します、この二つの智慧が圓滿に具足して居らなければ、人を眞實に救済することは能きないものでありますから、その如來の御智慧の偉大なことを併せて讃歎せられて、そこに渴仰の精神を打ち樹て、戀慕の情を燃やして居られたものであらうと思ひます。壽量品に『慧光照無量』といひ、『所以者何如來如實知見三界之相』乃至『如來明見無有錯謬』といひ、方便品に『引導衆生令離諸著』といふ風に、佛様の慈悲大悲の御智慧の働きを説かれてあります。如く、宇宙の實相を、時間的には三世にわたり空間的には十方にわたりて、遍く見定めて居られ、さ

似かよつてゐられたのではないかと想像されます、那の威あつて猛からざる、人を威壓するやうな泰山の如うな御風丰の中に、亦一切を抱容する親しみとやさしみが漂ふて、慈光に包まれて居られる如うな言ふに言はれぬ、御人格の輝きが漲つてゐらせられました。那の堂々たる巨軀を運んで、御寶前を悠々せまらざる御態度で御出ましになつて、この壇上に登られ、ちつと一とわたり満場を御見渡しになり、咳一咳して、徐ろに、底力のある餘裕のある御聲で説き出されしあの御姿が今猶彷彿として、眼底に印象深く刻み込まれて居りますが、もう、あれだけで渴仰戀慕の心が油然として湧き出でたのであります。又本多現下が如何に一種獨特の雄辯家であらせられたかは、天下周知のことでありますが、實に説法空化には偉大なる御力を有つて居られました。

それについて、私の感じたことは、本多現下が釋尊の御徳を御讃めになる時に、いつも必ず附け加へて話されたことは、釋尊は上には宇宙の實相を悟り下には一切衆生の機根を了知して、そこに適切な教化の實を擧げられたといふことをいつも仰しやつ

うして一切衆生の機根を洞察して、そこに適切な教化を施されたことを讃歎せられて居つたのだと思ひます。

無量義經に「性欲不同なるが故に説法無量」といひ、壽量品に「種々の性、種々の慾、種々の行、種々の憶想分別あるをもつての故に」といひ、「我佛眼をもつて信等の諸根の利鈍を觀じて」といふ風に佛様は或は「我等の深心の所行を知り給ふ」とか、「罪福の相に通達して無礙なり」とか、或は「因を知り果を知る」といふやうに、一切をあまねく手にとる如く知つて居られる、かういふことを纏めて、佛様は上には宇宙の實相を悟り、下には一切衆生の機根を觀て適切なる教化を行はれたといふ簡單な御言葉で讀めて居られたのだらうと思ひます。さうして本多親下は、宗祖のなされた如く、釋尊に對して非常な渴仰戀慕の情をよせて居られたことを推察するに難くないのであります、で、佛様の心の中がよく推し量られて、佛様の心を心として一切に向はれるから親下の御話を聴くものが、十人居れば十人、百人居れば百人、みな相當に満足したのだと思ひま

す。

本多親下は、この衆生の側についての觀察を徹底的に窮めつくして居られたのだらうと思ひます。その證據は、親下の著述たる聖語錄にくはしく載つて居ります。と申すのは、何れのお寺にせよ、教會にせよ、恚うした集團に眞面目に集まつて來るものはそれ／＼何等かの要求があつて、乃至何等かの動機によつて寄り集まるので、それを分類すれば千態萬様でせうが、これを親下は六通りに分類して居られます。聖語錄は實に大切な御書で、我々の信仰を導く上に缺くべからざる良書であらうと思ひます。是非これは一家に一冊は必ず家寶として備ふべきものと信じます。

一つには、實在的發心といつて、これは世間の無常とそれに伴ふ苦痛を直觀して起る發心であります。可愛い兒供に先立たれるとか、愛する妻に死別れるとか、さういふ愛別離の苦しみに直面した場合には日頃無宗教的な人でも、恚かる辛い經驗を嘗めると眞剣にその可愛いもの、死後の生存を考へるやうになる。又自分の死を考へても、この實在を求むる心

が動いてくるのであります。その時に信仰に這入つて痛む心を本當にごまかさずに、癒やすことが大切であります。マアさういふ人生の無常とそれに伴ふ苦痛を直覺した場合に起るのが實在的發心であります。

一つは感應的發心であります。これは本格に行けば、本佛の毎自作是念の悲願に感孚して、そこに我等の信仰が結びついて、御利益を蒙るといふので發心するのであります。卑近なところは、所謂叶はぬ時の神頼みで、日頃信仰の無い人でも一朝大病にでも罹つて醫者も薬も及ばぬといふことになり、逆も人力の及ばぬ災難を受けるやうな場合、超人間的の力の救を求めて禱る心が起る、さういふ人間が、力の救を求めて信仰に這入つてくるのを感應的發心と申してあります。

一つは懺悔的發心であります。これは犯した罪惡を自覺して自責の念に苦しめられるやうな場合に起るので、煩悶懊惱、人知れず胸のいたでに泣きさへさすして神や佛に縋つて只管に罪の消滅を祈る切なる欲求から信仰に這入るので、何れの宗教でも罪障消

滅を唱へて居ります。犯した罪惡を消滅するには、如何にすべきかといふことも大きな問題であります。懺悔的發心が擧げてあるのであります。人間は放つておくと墮落性の強いものでありますから、其所に犯した罪を消滅して更生の道を辿らねばならぬはずでありますから、そこで懺悔の方から信仰を擧いで救はるゝ道が開かれて居る譯であります。以上の實在的發心、感應的發心、懺悔的發心の三つが大多數を占めて居るのであらうと思ひます。

それから神秘的發心が擧げてあります。神秘といふのは、佛がいろ／＼の神變不可思議なことを現じて、それを見て信仰に導き入れられて行く場合を申すのであります。一見荒唐無稽な如うに思はれることが經典の上にあつても、それは皆釋尊の神通力のあらはれであつて、教化の上の善巧方便であるのであります。古來さうした不可思議現象によつて信仰に導かれて行くのも澤山ある譯であります。今日でも心霊研究杯が起つて、いろ／＼不思議なやうな心靈現象をみて一念發起する向きもあります。中には怪しいのがすいぶんありますから注意を要します

もの、何うしても神秘といふことは、正しい意味に於て認めねばなりません。

それから道義的發心であります、道義的感情を満足せしめんとする場合、矢張りそれが宗教的信念に繋がつて完成するのでありますから道義的發心が數へられて居る譯であります。

本多現下は、この道義的感情と宗教的情操との關係を頗る調節的に解釋し説明して居られます。而して御一代を通じてこの點を非常に強く力説されたことが明らかであります。

最後に推理的發心であります、これは哲學的に思案攻究して、其所に宇宙の超人的靈力を認めて、信仰に這入る場合のことでもあります。人知は有限であり、有限の人知をもつて無限なる宇宙の眞をつかむといふことは無理であります、有限の知識をもつて究め得たものから推及して全體的に究明してゆくのであります。

斯くの如く、本多現下は六通りの方面から觀察して、信仰に這入る徑路を明らかにして居られたのであります。

聖語録は法華三部經と宗祖の御妙判とを引用分類されてあります。而して本多現下はこの六通りのものを一方的に偏傾することを戒められて、飽くまでもその關係を良く肚に入れておくことが肝腎であると申して居られました。何故かと申さば、一例として、縦し信心はして居つても、人に對して親切を缺くが如きことあらば、そこに偏した所があるからだと思ひます。従つて、信仰と修養といふことは結局不可離のものであらうと思ひます。

何事でも純自力で行けるならば、修養一點張りて信仰は不必要かも知れず、又一切純他力で行けるならば、信仰一點ばりて修養は不必要かも知れせんしかし、純自力、純他力といふことは、事實上押し通せないとしてみれば、信仰と修養との關係は深く心得ねばなるまいと存じます。日蓮聖人でも、本多現下でも、そこは眞理觀の上から論じ來られてゐますから、日蓮主義の立場としては、自力、他力といふ語は使用されないのであります。恠かる點は將來充分に究明せねばならぬだらうと思ひます。

本多現下は一面世間の事にも頗る明るかつたので

てあります。

それはいつでも拜聽する御話の端に、上下の事情に精通して居られたと思ふ點が歴々と窺はれて、御所論が一つその肯綮にあたつてゐたことを、毎つも陰かに敬服措かざりし次第であります。

又祝下の御辯舌は多くの聽衆をして一々各人の心の琴線に觸れしむるものがありました。それについて想ひ起すことは、曾つて私が讀みました英國のスクエットマーデン翁のものした面白い話の一節であります。話の筋は

『それは或る廣い牧場に羊や牛の家畜の群れが遊んで居る中にライオンの仔が一匹交つて居つたのであります。其所へ向ふの小山の頂上に一頭の親ライオンが現はれて、今や、たてがみを擡ふて、やをら猛然と一と聲うなりをあげたのであります、それを聞いた羊や牛の家畜類は怖れ戦いて逃げ失せました。後に残つたライオンの仔は、さすがに健氣にも聽く耳を立て、見る／＼うちに仔獅子の血潮はもの凄く湧き立つたのであります。そして敢然として小山の頂上を目ざして疾風の如く親ライオンの許に藝進した』といふ物語りを興味深く流麗な筆で書かれ

本多現下の御話が一度び人々の心の琴線に觸るや、今まで胸底に潜在埋藏されてあつたところのものか、ムク／＼と擡頭して、そこに美はしい本の妙心が鮮やかに芽生えて來るといふ次第で、その都度、實に何とも形容の能きない心境に置かれつゝあつたことが、餘りにもまぎ／＼と記憶に残つて思慕の情禁する能はざる次第であります。

吾等の聖應院日生上人は斯くの如く無量の功德を現世に残されたことをそれからそれへとたどりまして、感愴今更の如く胸を蔽ふのであります。

これをもつて私の話は終ることにいたします。

(合掌)



品川問答三景

貝塚生

時は——寛永十九年二月十六日の卯の下刻。

所は——街道を鳥渡引つ込んだ品川宿の庄屋新兵衛の宅である。

新兵衛老夫婦は、夜來マンジヲもしないで、もどかしい一とよさを送つて了つた。心がいらついで床の中にも落ち付いては居られないので、外のまだ小暗い内から起き上り、二人は御寶前で一心に讀經唱題するのであつた。續く：續く：御題目は長く續いた。そして、もどかしさも、いらだちさも、いつか御題目の中へ溶け込んで了つて、二人は、今、唱題三昧にしたつてゐるのである。

新兵衛は、近所でも評判な法華信者で、それにはそばの本光寺の檀家總代でもあつた。この二人が、

兵衛は一向に氣付かずに御題目をあげ續けてゐる。鳥渡當惑した女は、三度目には、到頭主人の袖を黙つて軽く引つ張つた。これには流石に氣が付いて、時刻の巳に來てゐることを知ると、家内の琴を促して大急ぎで身仕度をし、アタフタと外の街道の方へ出て行つて了つたのである。

新兵衛を送り出した琴は琴で、何となくツハつてゐるが、結局、かう云ふ場合には大いの人々が經驗する様に、そばにゐた召使の女に話かけ、無暗に聲帯を振はせることによつて、せめて心の憔悴を我と自ら紛らはせるより外、全くどうも仕様はなかつた。

「本當に氣が氣つたらありはしない。大丈夫なのかしら、お前がさつき行つた時の御様子はどんなだったのだい」

「ソ〜、たいしたこともないと云ふのだつたネ何度きいても矢張り氣にかゝつてゐけないのだヨ、ほんとに御身體さへなんならネ、ゆふべ私が伺つた時には何でもないと氣を張つて仰言つておいでだ

毎朝御寶前で御勤めする事は、何の變哲もない話ではあるが、今朝は又、どうしてかうも長く力を込めてしてゐるのであらう。みてゐる人があつたら、その人は定めし不思議にさへ思つた程熱烈であつた。二月十六日と云へば、申すまでもない御祖師様の御誕生日である。けれども、これだけの理由では、今の新兵衛夫婦の動作を説明はし切れない。その心のいらつくまゝに御寶前に坐つた二人だが、今は巳に火の出る様な唱題勤行の二人に變つてゐるのである。召使の年増女が唐紙をあげて這入つて來て、新兵衛の耳元へ口を近寄せてモウ時刻が來たと告げた。しかし、御勤めに心を取られてゐた彼には、更に氣が付かなかつた。女は同じことを繰り返した。矢張り駄目である。女の聲も小さかつたのだらうが、新

つたが、本當の處は大分お苦しい様だつた。心配で心配でならないヨ。モウ今の刻限となつちやお寺の方へも行けないだらうから、その後の御様子も伺へないし——、ネエ」

「……………」
話しかけるのだから、一人ごとなのだから、ごつちともつかぬコンナ言葉を持ち出されては、召使の女にも何とも返事のしようがなかつた。そして言葉が途切れれば、心は又もとの憔悴に返つて、琴の動作は矢鱈にツハ〜する、火鉢の前で立つてみたり、坐つてみたりしても、どうも落ち付きはつかぬようである。日頃夫にもおとらぬ信仰の強い琴ではあるがかう云ふセツバ詰つた場合にもなれば、矢張り生れたまゝの木地が顔を出して、心は動轉又動轉であるおのが身を持ち扱かい兼ねた琴の行く所は、結局又もとの御寶前であつた。かん高い少々ヒステリカルなお題目が、やけに力の這入つた木鐘の音と共に、再び始められるのであつた。

新兵衛老夫婦の落ちつきを失つた動作には、全く大きな譯があつたのである。實は、今日日本光寺で、

任職の日啓上人と、芝増上寺の意傳和尚との間に念佛無間に就いての大問答が行はれようと云ふのであつた。然もそれが、只二ヶ寺の間でやると云ふのにといまらないで、これは又珍らしくも、時の御老中が立會ひ、かへて加へて三代將軍家光さへ御席にならうと云ふのである。將軍迄御同席相なるとは、全く異例な出来事たるを失はない。豫定通りなら、將軍の御供は次の様な筈なのである。

御老中

堀田加賀守正盛

酒井讃岐守忠勝

久世大和守廣之

朽木民部少輔種綱

其他御近習外様之諸士

寺社奉行 内藤豊後守

東海寺澤庵

伊奈半十郎

増上寺 意傳

本光寺 日啓

御郡代
念佛無問の問答

本光寺の日啓上人は磐石の様な人である、どんなことがあつても金輪際問答に負けつことはない、夫

婦は堅く信じて疑はなかつた。問答の御達しが内々あつた時も、夫婦はこれを聞いて却つて喜んだ位のものである。けれども女は矢張り女であつた。琴は大丈夫とは思つても、亦何とない不安が心のはづれに感じられてならないのであつた。

「あなた、先方の意傳と云ふ坊さんは、一體どんな人なんでせう。ソリヤー内のお上人なら、相手にどんな人が來てもやられつこないとわたしも安心してゐますが……ネエ、どんなものなのでせう」

「お前は又くだらないことを云ひ出すもんだナ、大丈夫だヨ。大丈夫たら大丈夫だ。あの内のお上人が負けつこありやあしなないちやあないか。どうすりやあ又そんなくだらないことを云ひ出すんだ。モウそんな話はやめにして貰ひませう」

「けれども、一應は先方の様子もきいてみないでいゝんですか。あなたの云ふことは全く本當ですし、ナニ私だつてさう思つてはゐますが、一日位はひまを缺いて芝の親戚へでも行き、むかうの様子も少しはきいたらいゝぢやありませんか。安心の上にも安心の行くようにしなけりやあ嘘ですヨ。お願ひで

すからさうして下さいナ。もしたつてあなたがいやだと仰言るなら、わたしが行つて來ます」

「そんならお前の氣のすむようにするさ、わしやアソクナ氣にはなれないネ。わしは、根つ切りお上人を信じてゐるんだ。ソクナ氣の弱い話はきくのもいやだ。お前が氣にすまないなら、お前一人で氣のすむようにするがいゝ。やめだ、そんな話はモウ――」

新兵衛の頭には、將軍様や御老中様等のズラリと居並ぶ面前で、常日頃お慕ひ申す日啓上人が、小氣味のよい程相手方の意傳和尚とやらを詰め込んで了つた胸のすく様な状態が髣髴としてならなかつた。

前以つて相手の學徳を調べるなどの必要は毛頭認めなかつたのである。その上、その問答のある日が、どうした廻り合せか、月も月、日も日、二月十六日と云ふ御聖誕日に行はれようと云ふのだから、新兵衛に取つては、モウたまらない嬉しさであつた。幾度考へても、考へれば考へる程小氣味のよいことであつた。胸のすく様なことでさへあつた。只一ツ不思議に思はれるのは、なぜ將軍様がソクナ念佛無問

の問答などを御さゝになるのだらうかと云ふことである。いくら庄屋はしてゐても、かう云ふお上のことは、新兵衛にはチツトモ判らなかつた。只々不思議でならないのみであつた。

琴は、夫の新兵衛にいくらたのんでも、相手のことに就いて調べてくれさうもないので、到頭一日、芝の親戚へ行つて、アツチコツチと意傳和尚の噂をきいて歩いた。色々の話もあつたが、それ等を綜合すると、結局、意傳和尚も相當の人だと云ふことに落ち付いた。琴は、少し心配になつて來た。しかし夫の新兵衛は、これを聞いても全然耳は貸さないで矢張り日啓上人を信じ切つてゐた。

喜び切つてゐた新兵衛、喜びの内にもどこか一抹の不安を懐いてゐた家内の琴、その間にこゝに計らずも一ツの心配事が湧き起つたのである。問答も已に間近に迫つた十一二日頃と云ふのに、日啓上人が御持病をおこし始められたことが、即ちそれであつた。御持病のことだから別段大したこともあるまいと、最初は氣やすく思つてゐたのに、どうしたものか今度に限つていつもと違ひ、大分にお悪い様な

である。氣強この新兵衛も、こればかりには弱つて了つた。その昔の阿佛房夫婦が大聖人をお慕ひし申したにもまさつて、この上ない憧憬を日啓上人によせてゐた新兵衛老夫婦には、洵に身も世もあらぬ心配事であつた。かうなつて來ると、流石に新兵衛にも、不安が襲ひ始めて來た。いくら相手の意傳和尚が立派な人でも、すぐれた法華の教と、それを説く日啓上人さへあれば、全く負けつこないのだが、肝心のお上人がこの御病氣では駄目だ。すぐれた教も上人なくしては、寶の持ちぐされにも等しい話だ。新兵衛にも、茲に不安の雲が往來し始めたのだつた。それにつけても、十六日迄には是非お上人になほつていたゞかなければならない。夫婦は躍起となつた。夫婦は心をつくして御看病申し上げた。夜だけは何と云つてもお上人の方で辭退されるので寺に泊るわけにも行かなかつたが、晝間はつめ切りで御世話したのである。お上人の落ち付いた合間をみては、本堂へ行つて夫婦は御祈りをした。夜は夜で、どうしても四五日先に迫つた十六日當日のことが心にかゝつて、一晚中マンジリともしないで、夜の白むのを

覚えることであつた。いくら日啓上人が傑出した人であつても、人間である以上、病にはかてない。このまゝであつたら相手の意傳和尚と言ひあふ前に、上人は先づ病に負けなければならぬ運命にあつたのである。

十三日——思はしくない。

十四日——依然として悪い。

十五日——駄目である。

そして終に十六日——。

十六日は到頭やつて來たのである。其日は朝から氣持のよい小春日であつた。焦點をわざとはづして自らの線を淡くぼかした太陽は、品川の海にその美しく光を落してゐる。盛りをすぎた梅のあとには、桃の花がモウ蕾を大きくして自分の出る時を待つてゐるのだ。春信しきりに起つて遊子の心をそつて止まない。世はをしなべて長閑な春景色である。只こゝに、おだやかでないのは、新兵衛夫婦の心の内だけであつた。もう仕様はない。事は已に來たる可き處にまで來たりついて了つたのである。

新兵衛は上様御通りの刻限が近づいたので、身仕

度をすますと、アタフタと外の街道の方へ出て行つて了つた。ソハ／＼してゐた家内の琴は、身をあつかひ兼ねて又御寶前へ坐つた。

聽て、本光寺へ御成りの將軍様お通りのさわめきが、街道の方から新兵衛の宅へも聞えて來た。

二

「そんなわけで、意傳和尚の奴、サンザンに追ひ込められて、終ひにはグーの音も出なくなつちやつたんです。氣持のいいのなんのつて、こんなのはほかにたんとはありませんヨ」

「わしも救はれたと云ふもんだ、何んだナ、コーツと……ソード、溜飲が下るつて云ふ奴だ」

「日泰さん、デモ意傳和尚の奴はチット可愛想ですネ。様づけにも當りませんが、意傳和尚位で止めておゝきなさいナ。奴だけは餘計ものですヨ」

「さうでした／＼。遂はなしに乗つて來たので氣の毒なことを云ひました。デハ、意傳和尚——ツと。

これでいゝですカ御新造さん」

おとなしい本光寺の所化日泰は、始めの内こそいつもの様に静にはなしてゐたが、話が終りに近付く

頃にはモウすつかり身振り手振りも板に付いて、話に乗り切つてゐた。これをさく新兵衛夫婦は、全く有頂天である。

日泰の本光寺からの快報は、その朝の落ち付かぬ様子ど打つて變つて、新兵衛の家の中を至つて明る

いものにしてゐたのである。

「勝つた話にばかり氣を取られてゐたが、お上人のお身體の方は一體どうなんだい。お疲れだらうネ」

「さうでした。お上人様は、大層お草臥れの様です。實は、ほか様へは兎に角、こちらさんだけへは早速にも會つて、色々御心配をかけた御禮を——ことなり申し述べたいと、床の中で仰言つたのですが、何分お疲れがおヒドイ様なので、何れおなほりになりさへすれば又御會ひも出來ると云ふものですから、私共がはたから無理に御止めになる様申し上げたのでムいませぬ。どうぞ、その點はあしからず思召し下さいます様に……」

「何、そんな御挨拶には及ばないヨ。お身體さへ早く元通りになつて下さりさへすれば、それにこした喜びはないのだ。デ、どんななんだい」

「ハ、あれで二三日、人にも御眼にかゝらないで静にしてゐらつしたたら、大いによくおなりだらうと存じます」

「お疲れだらうヨ。普通の身體でさへ、あんな問答のあとは氣づかれがするだらうからネ」

「わたしも本當に氣にかゝつてなりませんが、日泰さん、御許しさへ出たら、わたしはすぐにでも行つて又御世話申し上げますからね、よかつたら本當にすぐ来て教へて下さいヨ。遠慮しないで言つて下さいヨ」

「御新造さんの御親切には、お上人も心から喜んでいらつしやいます。こんなことを申しては何ですが私には、御新造さんが、昔の千日尼か、國府入道の尼の様に思はれてならないのです。お上人様とこちら様とは、何か遠い昔からの因縁でもありますのでせう」

「處で日泰さん、なにかい、意傳和尚は丸で内のお上人には齒が立たなかつたのかい。何か一ことか二こと位は切り込んで行けさうなものだのにね」

「イヤ、齒が立つにも立たないにも、始めつからテ

が洵に振つてゐる」

一時落ち付いた日泰の言葉は、話と共に又少々亂暴に返つて行つた。

「お上人の曰くですよ——今日の御題たる念佛無間の儀は如何様になりました。禪儀なれば、こゝに東海寺の禪師様も御出で、ムリますれば、態々、和上を御煩はし申すにも及ばざることに存じます」

「芝居が、りり日泰さん、中々うまいものだネ。ダガ、さう急に鋒先が變つて來ると、東海寺もウツカリはしてゐられなくなつて來たと云ふものだ。東海寺、驚いたらうナ。一體、東海寺、その時どんな顔をしてゐたイ」

「そこなのです。逆も、變でしたヨ」

「さうだらう、御一同の居並んだ前で、サンザンな和尚の二の舞を踏んだのでは、たまらないからナ。和尚も和尚だが、東海寺も東海寺で、思はざる處から敵が出たものだど定めしビックリしたことだらうヨ。今日は念佛無間が御題チャ、禪問答ではムらぬ喝！なんてくだらなく逃げを打つた處で、將軍様の御前では鳥渡通らないだらうからナ。禪師殿、今日

ンデお話ではなかつたのですヨ、和尚の方では、これでもかゝと随分激しく衝いて來るのですが、これが又一ツツと氣持のいゝようにはねッ返されて了ふのですから、胸のすくつたらありはしないのですダガ、向ふとしてみたら、將軍様や御老中様の前でこんな氣量の悪い話はなかつたでせう。そばについてゐた私でさへ、終ひには氣持のよいのが通り越して、却つて少し氣の毒になつて來た位でしたからネ東海寺の澤庵様は、あゝ云ふ人ですから、手作り塑像みたいに、始めつから終ひまで無表情にダマリこくつて坐つてゐましたが、腹の内では、法華も日蓮宗のものに持たせると、かうも根強い力になるものかと、驚いてゐたこととせう」

「そりやあさうだ。東海寺も驚いたらうヨ」

「ソ、東海寺の禪師つて云へば、面白かつたのですヨ、意傳の奴——イヤ、意傳和尚でしたつケ意傳和尚が出す言葉も——一ツ残らず打ち伏されて了ふので、あとでは進二無二になつて、そも——禪天魔と申すは如何——などと、丸で見當違ひのことを云ひ出したものですが、その時のお上人のお言葉

はよき折なれば、この序に、余が面前にて當方の日啓とやらと、問答いたすがよいぞ。余は所望いたす……テナことになつたら、禪師も浮ばれないからナ。さうなつて來れば、將軍様から御老中様から内のお上人迄皆ヒツくるめて、深山木に見立て涼しく納つてもゐられなくなつたらう」

「面白いと云つては失禮なのですけれど、實際面白いムいでした」

丁度此時、寺から使ひが來て、用が出來たから話がつんだらすぐ日泰に歸つて來る様にこの事であつた。

外はモウ全く暗くなつてゐた。日泰は、モウト話をしてゐたかつたし、夫婦も亦聞いてゐたかつたらしいが、使ひが使ひなので日泰はすぐ座を立つた。そして、裏口を出ると、日泰の姿は背戸の暗闇へ吸ひ込まれる様に消えて行つた。新兵衛夫婦は、これから御禮の御勤めを始めるのである。

三

白い李の花も、黄い山吹も、モウとつくに散つて了つた。夏が來、秋が來、そして冬が去つて行く

體て又新しい装ひをこらした長閑な春が、年を越して巡つて來るのだつた。水の温み始めた海づらを撫で、吹いて來る南の風は、一雨毎に暖さを加へて行く。品川の春の海は、前の年と同じ様に何と云つても矢張りのびやかなものであつた。

庄屋の新兵衛は、一年前のことを思ひ出しては、一人氣持よがつてゐた。日啓上人の健康は、一時は案じられもしたが、今では全く本復し、却つて以前より丈夫にさへなられた様である。師檀の關係は、益々こまやかであつた。問答がすむとその快報もたらして話に來てくれた日泰は、今、京都の本山の方へ行つてゐる。あはれをとめたのは、問答があつてから間もない後の、新兵衛の案内の急逝であつた、新兵衛は、一人残されたが、唱題三昧の生活に這入つて、後の世に靈山で家内と又行き會ふのを、せめてもの楽しみにしてゐる。

暖い日射しを一杯に受け切つた南の椽に、新兵衛は當り箱を持ち出して、京都にゐる日泰宛の手紙を書き續けてゐる。大きな字で、無造作に書きつけてあるのだが、紙は可成り長く右手の方へとのびてゐる。

椽以來厚く御信仰相成り居るもの故、今漸く御三代に及びて御改宗これありては、世のきこえも如何かと思はれ候間、増上寺儀は一通になしをき、法華經御信仰の儀は、天台法華宗よろしく候と、申し述べられたるやに候。これによりて、將軍様は深く天台宗を御信じ遊ばし、當地上野へ圓頓院御建立の儀有之、これは出來上りたる後、御地比叡山の東にあるものとして東叡山、又建立の年號をとりて寛永寺 と呼ばるゝ筈に御座候。更に又この南光坊僧正は、この新寺の住持になはらるゝことにて候。……

手にもつた巻紙を、字の進むに連れて巧くあしらつては、下へ下へと落して行く左手、筆の尖端を輕へ指間にはさんで、スラ／＼と書き運んで行く素早い右手、共にあざやかなもので、二年や三年の練習では逆も出來さうもない美事な技術である。新兵衛は、顔に似合はぬテクニクツクの所有者なのだ。

手紙は、マダ／＼續いて行つた……
日向ボツコにも、ものうくなつた三毛が、椽のは

た。

……かゝる次第にて、あの問答の後の將軍様はいたく法華に御執心遊ばす様相成り、貴邊御地へお去りなされてより間もなく、各宗諸本山の高僧方を残らず登城せしめ、貴賤を問はず成佛いたす可きの法、又天下泰平萬民を治す可きの法を、御下間に相成り候處、諸山の高僧、只互に目と目を見合すのみにて、一言も申し上ぐる者これなく、折角の場もいたく白け切り候折柄、その場に居合せたる身延山主日遠上人、ヤオラ座を進められてそは我が法華に限るとの旨、言上いたされたる由に御座候、後、一同退出となりし折、日遠上人のみは御居残りを命ぜられ、將軍様より親しく佛法の道理に就きて御下間を受け、委細に如來金口の說法などを御きかせ申したるとの事、こゝに全く法華に御歸依遊ばされ、御改宗の儀にも及び兼ね候處、此の折、御地比叡山にありし南光坊僧正、此の旨仄聞ありて、大いに驚き、早々早馬にて御歸參相成り、直ちに御目通りして、淨土宗は權現

してノビ／＼と大きなのびを一ツするのであつた。春の日向は、洵に静閑である。

新 加 盟 者

- 東京市麻布區我善坊町三四 家 喜 金 吾殿 (中市松氏御紹介)
- 東京市品川區北品川三ノ一九八 秋 澤 吉 藏殿
- 同 豊島區巢鴨七ノ一七九三 須 藤 和 市殿 (磯部氏御紹介)
- 大阪市東成區東小橋北ノ町 鷲 田 重 政殿
- 同 猪飼野町二條通 林 惣 治殿 (梶木顯正御紹介)

★★★ 記事 ★★★

本部 團報

開宗記念思想對策大講演會 四月廿八日午後七時謝恩法要を度修し、夫より左記の順序に依つて大講演會に移つた。

- 開會の辭 理事 磯部滿事氏
 世法即佛法 理事長 上田辰卯氏
 熱河の狀況 陸軍少將 中山 善氏
 閉會の挨拶 文學士 河合勝明氏

此の日は恰度賀上人の本佛教會開教第十周年、又洗足清明會設立十五周年記念に付夫れ、特別大會が催された關係上、本會館としては從來にない寂寞の感があつた、けれ共各講師の御熱誠と、又珍らしく前東京汽船會社重役原論三氏其他識者達の來聽されて居たことは全く大きな歡であつた。當日の講話は次第に順次掲載されるであらう。

法華經講座 毎週木曜日午後七時より一時間半に亘つて、小林一郞先生の至誠を以て贊嘆多き、誰れにも會得し易き妙法華經の講話が廣げられて、毎會來聽者の新顔が増すことは

法慶至極の事である。猶二三の方からの御希望もあつたので、聽講券所持の方は他に御一人の同伴者を無料とされますから、此際一人でも多く來聽されん事を切望する次第である。

日曜日修法と講演會 四月三十日、五月七日十四日及廿一日の各日曜日午後二時より修法後に河合勝明氏、梶木顯正師、村田顯道師、磯部滿事氏等に依つて「開目抄」續講、「法華經は何を語るか」「所感」「小乘より實大乘へ」「日蓮主義とは何ぞ」等の題目で熱辯が振られた。

還來の珍客 四月中旬に大阪から立正青年團清原淺治郎氏の賢息が來給され、一日前後して神戸の統一團員として篤信の森岡正男氏が來訪された。五月中旬には山口縣萩で有名な日蓮主義者小高興吉先生が、全國醫師大會に參列され其御用済の上來館御多忙中を特に兩三日滞在されて、十四日の朝名殘惜しくも佐渡御靈顯參拜歸途に就かれた。同十六日福島の中村夫人が福岡阿蘇雄氏と共に御來訪下さつた、宴言談の夫人はあまりお話しも聞かされなかつたが、併し志を同ふする者には相見ゆるのみで、無言の裡に深い感應を覺える。

各地の同志が、上京されてお忙しい御用向の中を、二時間でも、三時間でも、一日、二日乃至出來る丈け水く足を留めて頂き、其晴々しいお姿に接する時に、何共云へぬ力強い喜びしさを感ずる。私共の如き貧窮な者にも、恩師を通じて、宗祖のおかげに依り、佛陀の加被あればこそと彌々有難さに合掌する。

横濱 教誌

四月三日 夜、神奈川藤原町佐藤氏方にて集會、例の如く磯部先生東京より御來講。
 同 九日 夜、磯子の高橋氏方にて集會。
 同 十日 和賀義見師東京湯野川より御來講。晝は午後三時より生妻貝塚氏方、夜は七時より神奈川三ツ澤の岩上氏方にて。
 同 十三日 夜、神奈川鶴屋町京田氏方にて集會。
 同 十四日 夜、中區千歲町和田氏方にて集會。
 同 十五日 小西日喜師東京小松川より御來講。午後三時より神奈川高島通石毛氏方、午後七時より同二本樓の金子氏方にて。
 同 十六日 會員久保田氏父君の七七忌忌

に相當るので和賀義見師が御導師となり會員一同齊り集つて午後二時より同氏宅にて唱題廻向した。法要後、同師より「廻向の生活」と題した御話をいたされた。

同 二十四日 夜、磯子の稲葉氏方にて集會。
 同 二十七日 夜、神奈川三ツ澤の青藤氏方にて午後七時より小西日喜師の御法話があつた。

此日磯部先生は本部に於ける法華經講座の爲めお出でなく他は御多忙中を殆んど毎回東京から御來演あり澤々として倦まざる御慈教を御もらし下された。

二本松 教信

四月九日 夜、於蓮華寺題目講修行。
 同 十六日 社會事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
 同 二十二日 免因保護事業安達佛敎慈善會托鉢修行。
 同 二十八日 於會津若松市妙法寺開山忌法要修行。
 一、七種の婦人に就て 中島元道師

寄附維持金團費誌料領收

(自四月二十一日至五月二十日)

一金拾 圓也	横濱	中村清兵衛殿	一金壹圓貳拾錢也	千葉	山中 保榮殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	中 市松殿	一金壹圓貳拾錢也	大阪	遠藤 實照殿
一金參圓五拾錢也	同	菊地 雄三殿	一金貳圓貳拾錢也	京都	金光 孝碩殿
一金貳圓 圓也	同	宇野 博順殿	一金貳圓貳拾錢也	大阪	廣野 勇吉殿
一金壹圓 圓也	同	宮崎 武徳殿	一金貳圓貳拾錢也	西宮	山本小四郎殿
一金壹圓 圓也	同	加藤重太郎殿	一金拾 圓也	札幌	林 啓太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同	岸野藤右衛門殿	一金壹圓貳拾錢也	愛知縣	長 遠 寺殿
一金貳圓貳拾錢也	同	濱松 彦次殿	一金貳圓貳拾錢也	東京	沼部彌太郎殿
一金參圓四拾錢也	神戸	西 廣次殿	一金貳圓貳拾錢也	静岡縣	川手 海祥殿
一金貳圓貳拾錢也	大阪	小澤 増殿	一金拾 圓也	福島	中村 美津殿
一金五 圓也	愛知縣	三城 房吉殿	一金壹圓貳拾錢也	東京	前田 忠次殿
一金壹圓貳拾錢也	神戸	倉藤喜一郎殿	一金壹圓 圓也	東京	小林 長吉殿
一金壹圓 圓也	東京	小峰 豊子殿	一金貳圓 圓也	東京	小峰 豊子殿
一金拾 圓也	同	井上道太郎殿	一金貳圓 圓也	同	大久保 龍殿
一金參 圓也	同	横山 正三殿	一金五 圓也	同	幸喜丸 平 爲厚殿
一金五 圓也	同	同 人 殿	一金拾 圓也	神戸	野崎新之助殿
一金貳圓貳拾錢也	山梨縣	山本禮三郎殿	一金參圓五拾錢也	東京	菊地 雄三殿
一金壹圓貳拾錢也	東京	相良 直一殿	一金貳圓 錢也	同	須藤 和市殿
一金五 圓也	同	森岡 正男殿	一金貳圓五拾錢也	大阪	鷺出 重政殿
一金貳圓 圓也	同	山田 英二殿	一金貳圓五拾錢也	同	林 惣治殿
一金貳圓貳拾錢也	同	柴田 武治殿			
一金貳圓貳拾錢也	同	酒井 善吉殿			

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

◇編輯室より◇

●初夏の新緑が滿都を覆つた、ある人が森の都とよこ呼ばれる丈に場所によつては早や故軍の總攻撃猛烈である、幸に新會館には一樹も見の代りにこの憂が今分らない、そこで殺生もせず済むと思へば實に嬉しい。

●静かなるべき京洛の天地に、好ましからの物議が醸されつゝある事の原因はいづれにもあらうが、上長の命に服せざるのみならず彌々反抗態度の範を、最高學府から示すに到つては、教育の價值尊嚴もあり得ない、是れこそ學問亡國であるまいか。宗教のない教育は智慧ある悪魔を造るの言、何と嘘でなからう。

●今の時大義明分を明かにする事が極めて必要と思ふ、恰も本誌下山鈔の 恩師御講述をば特に御精讀願ひたい。和賀上人が御不自由のお體であり乍ら、釋尊と日蓮聖人の長篇を御執筆下さつた事は、私共の慚愧措く能はざる所である。開祖什師の謨議章を平易に講明せらるゝ梶木上人の法勞洵に多とするものである。

●數千里の海外にも同志はあつて遙かに 恩師の追憶を寄せられた武田氏、又關西の篤信井上氏の感話と共に私共の臉を熱上せしむる ●貝塚氏の品川問答は、ひれくれた理窟なしに、其輪廓が執筆に依つてメラ／＼と示されてゐるのはうれしい。

●松尾清明師が涙の出る御不自由サで、御寄稿を戴きつゝ次號に割愛せる事を深く遺憾とするもの、爰に陳謝しておく。

●氣候の換り目に皆様の御自愛を祈り上ります。

價定一統	
一冊	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢
一ヶ月	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
金前	金前

料告廣一統	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓
送料共	送料共
金前	金前

昭和八年五月廿四日印刷納本
昭和八年六月一日發行 (第四百五十九號)

東京市小石川區音羽町六丁目一七

不許複製

編輯兼 磯部滿事
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京市品川區品川二丁目一八一
都印刷所 電話芝輪六〇二四番

發行所

財團法人統一團

東京市小石川區音羽町六丁目一七

電話牛込五三三六番
電話東京九四二〇番

目次

聖語	三首御詠義解(上)……………日生上人
世法即佛法……………	上田辰卯
花卉藝術と宗教……………	松尾清明
解説欄	京大法學部の側面觀……………波瀾子
記	かくて大事を成す……………洗心庵
事	○本團報並に各地教信
	○寄附團費誌料領收

第三十八年七月號

統一團發行

法財人團統一團發行